

「ユダヤ人とサマリア人」（ルカ一〇章二五〜二七節）

1 今年の平和聖日

今年五月二五日、アメリカで、一人の黒人男性が、白人の警察官に膝で首を絞められ、窒息して死ぬという事件が発生しました。それをきっかけに、アメリカだけでなく、全世界で、人種差別の問題が、改めてクローズアップされ、色々と、私どもも考えさせられているところです。

こういった人種差別、民族差別の問題は、人間の根本的な問題、まさに罪としか言いようのないもので、人類が背負わざをえない、いわば歴史的な原罪であって、アメリカだけのことでありません。

かつてよく私どもが耳にしていたのは南アフリカのアパルトヘイト（分離、隔離）のことです。一九九四年になって完全に廃止されましたが、古くオランダの東インド会社による植民地建設にはじまったものです（一七世紀）。第二次大戦後も、イギリスやオランダにルーツをもつ白人の支配的な地位を守るため、アフリカ系、アジア系の有色人種が長いあいだ差別されてきました。

このアパルトヘイト政策の廃止のため、世界のキリスト教（教会）が大きな役割を果たしたことは、ご存じの方も多いと思います。南ア聖公会のツツ主教（Tutu）、あるいはネルソン・マンデラ（1918-2013）の名前が知られています。マンデラは、若い頃に知ったキリスト教信仰をもって、長い獄中生活にも耐え、解放闘争に従事した人です。

イエスの福音には、まさにこうした人種差別を根本的に改変させる力があると信じたのです。南アフリカ長老教会が一九八一年に発表した信仰宣言には、イエス・キリストについて、次のように言い表（告白）されています。

わたしたちは、全世界が神に対して和解するために、
人種、文化あるいは階級のあらゆる分離された障壁を突破するために、
そしてすべての民を一つの体へと統合するために、
人となられ、死なれ、勝利のうちに復活された御子なる神を信じる。

（南アフリカ教会のための信仰宣言より）

ここに言われている和解、これがイエス・キリストのなし遂げ、もたらしたことです。この方は神と人との間に立って、その十字架の死と復活によって私どもの罪を赦さない、神と世界との和解をなした方です。それはまた同時に、私どもが和解を受けた仲間として一つとされるため、一つの体とされるためでもあったのです。それがキリストの教会です。

さて今日人種差別のことから話しを始めたのは、教会の行事歴で今日は平和聖日だからです。抽象的な平和ではなく、人が互いに和解し、融和し合って歩むことができますように、祈りたいからです。

戦後七五年、私ども日本人にとって、一九四五年八月（一五日）こそ、国の歩みの出発点でなければなりません。平和への志は憲法に書き込まれている通りです。もち

ろん書いてあるから大丈夫ということではありません。くり返し、その志に立ち返って、そこに深く根差した歩みをなさなければならぬ。そうした平和への思いを強めてくれるのが私は聖書だと思います。聖書は、平和は神との和解から生まれると言っています。神との隔てを神ご自身が取り去ってくださった。それはそのまま、私どもの中にある様々な隔て、国と国の隔て、人と人との隔てが、私どもが認める認めないにかかわりなく、すでに取り去られている（ローマ五・一）ことでもあります。和解の福音がもたらした平和の事実に立って、私どもは、身の回りからはじめて、更に大きな平和を希求し歩みたいのです。

2 善いサマリア人

そうした私どもの平和の歩みが、隣人と共に生きる道が、どのようにして可能になるのか、今日の聖書は私どもに教えています。

はじめに、イエスが、譬えを含む教えを語られるまで、質問者とのやりとりを確認しておきます。

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と問われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります」。イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」。しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った（二五〜二九節）。

質問者は一人の「律法の専門家」です。彼がイエスを「試そうとした」とここにありま

ります。イエスが隣人愛を実行せよと言うと、質問者は、実行したいけれど、誰が隣人だから分らないので、できない、と言外に匂わせています。隣人が誰か分かれば行えるのにといいわけです。結局のところ、この律法の専門家は、隣人と共に生きることをしたくないのです。それを隠すために質問者はイエスと、何か抽象的、理論的な対決をしようとしているように見えます。

これに対してイエスにとって、問題は行うことでした。今日の聖書箇所、譬え（三〇〜三五節）を除いた部分、いまお読みした最初のやりとり（二五〜二九節）と、譬えのあとの最後のやりとり（三六〜三七節）、そこに「行う、する」(do)という語が何回も出てきます。イエスの言葉の中では強い命令の言葉として出てきます（「それを実行しなさい」二八節、「あなたも同じようにしなさい」三七節）。イエスにとって、行うこと、すること、がどこまでも問題であったのです。イエスの譬えの前半を読みます。

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、

追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下つて来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると道の向こう側を通って行った(三〇〇〜三二二節)。

神殿のあったエルサレムは海拔八〇〇メートルの山の上の町、エリコは海拔以下の町で、その間をつなぐ街道は、しばしばこうしたことの起こる、非常に危険な山道であったようです。

祭司やレビ人らはエルサレムの神殿でお勤めをして、生活の場所としてのエリコに戻る途中でした。二人とも同じような振舞いを見せています。傷つき倒れていた人を彼らは「見ると」、あるいは「その場所にやってくる」と、すぐにそこを離れ、遠回りして、立ち去ってしまいます。祭司、レビ人という、いわば宗教家だったのは皮肉ですが、ここではそれはとくに問題になっていません。二人とも助けることなく行ってしまった、それが問題です。しばらくしてもう一人の人が通りかかります。

ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出して、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います」(三三三〜三五節)。

倒れていた人を助けたのはサマリア人だったと言われています。サマリアというのはユダヤとガリラヤの間に挟まれた地域ですが、サマリア人というのは、その地域に住んでいる人という意味ではありません。もともとはユダヤ人なのですが、長い歴史の中で、混血を重ね、宗教もユダヤ教と違っていて、例えば旧約聖書の最初の五つの書物(トラー)しか経典としては認めない、神殿もエルサレムではなく、ゲリジム山に自分たちの神殿をつくっていたのです。イエスの時代には全く別の人種として、少数者として住んでいた人たちです。

ユダヤ人たちは、彼らを同胞、隣人とは認めず、したがって律法によって愛さなければならぬ範囲にも入っていなかった。彼らとは交際をしない。そういう存在であったのです。

それにしても、傷ついた人を助けたこのサマリア人の行為の、事態にそくした周到さは見事です。その動機を聖書は、その人を見て「憐れに思った」からと言っています。福音書のイエスの憐れみにも通じるものです(ルカ七・一三)。サマリア人にとって、そこに倒れている人がある、苦しんでいる人がある、そのことが彼を動かしたのです。彼がだれであったかは問題にならないのです。

3 隣人となる

譬えを語ったあと、イエスは、もう一度、質問を發したその「律法の専門家」に問いかけます。

さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です」。そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい」(三六〜三七節)。

何より重要なのは、イエスの質問の言葉です。最初、この律法の専門家は「わたしの隣人とはだれですか」とイエスに聞いたのです。彼にとって、隣人というのは、はじめから決まっていました。この人は隣人、この民族の人は隣人ではない、などです。イエスは、隣人になるという言い方をしています。はじめから決まっているのではない。人は隣人になるのです。旅をしていたサマリア人、彼は倒れていた人がユダヤ人であろうがなかるうが(聖書には書いてない。おそらくそれは問題にはならない)、サマリア人は、その一連の行為によって、傷ついていた人の隣人となったのです。

律法の専門家は、隣人になったのはだれだとあなたは思うのかというイエスの問いに、端的に、そのサマリア人です、とは答えることができませんでした。そのように認めることは、ユダヤ人たる彼には、できなかったのです。しかしそれでも彼は、「その人を助けた人です」とまでは言わざるをえませんでした。ここは字句通り訳せば「その人に慈悲深いことをした人です」(口語訳)となります。「・・・した人」です。そうです、ここで、隣人となるということは、行いにおいて「なる」のです。はじめに触れた、アメリカの今回の騒動、テレビなどで見ると、抗議活動をする人に、たくさん白人も混じっています。隣人に「なる」ことによって隣人であるのです。そうであれば、すべての人が私どもにとつて隣人なのです。

そこでイエスは命じます。「行って、あなたも同じようにしなさい」。ここでも、問題は、することです。そしてこのイエスの命令の言葉、その問いは、あの律法の専門家にとつても、これを聞く私どもにも、開かれたままです。イエスは答えることを待っているのです。

もう一つ最後に付け加えておきたいと思います。先ほどサマリア人のしたこと、全く周到なものだと申しました。このサマリア人にはイエスを思い起こさせるものがあります。サマリア人にイエスを重ねて見る見方も、理解の伝統として教会に受け継がれています。

もしこの旅するサマリア人に私どもが私どもを重ねるなら、サマリア人は私どもの模範です。しかしもしサマリア人がじつはイエスのことだと見ることが許されるなら、私どもは、むしろ、このサマリア人に助けられた、傷ついて、路傍に横たわっていた者のことになります。

その私どものそばにイエスは来られ、見て、隣れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、介抱してくださいました。救ってくださいましたのです。サマリア人には、つまりイエスには、私どもと隔てはないのです。イエス・キリストは神が人と連帯してくださいましたことのです。イエスこそ私どもの隣人です。この方に助けられた私どもも、したがって人と人との隔てを越えて、人と共に在り、隣人となり、平和の道を共に歩みたいと願うものです。